

キリスト教の視覚文化における「^{ヒエロトピー}神聖空間」と「^{トポミメーシス}場の模倣」

——トスカナの聖母像崇敬を例に——

水 野 千 依

はじめに——聖なる「もの」と「場」

キリスト教において、神聖とされる「もの」や「場」とはいかなるものだろうか。

ユダヤ教を母胎として発展したキリスト教は、高次の精神に対して肉体や物質を否定する二元論的思想や、モーセが授った十戒の第二戒により知られるように、いかなる偶像の制作も崇拜も禁じる偶像否定的態度を継承した。それゆえ、「もの」や「イメージ」それ自体に聖性をみる態度は本来的には認められない。神の姿は人間の目には捉えられず、受肉によりこの世に人として送られ見えるものとなったキリストとて、受難後に昇天し、その身体はこの世の終末、つまり最後の審判における再臨の時まで失われた。地上に残されたのは、かつて彼がこの世にいた際に触れたもの、身にまとったものといった形見にすぎない。したがって、キリスト教において神聖とされる「もの」には、聖なる存在の一部をなすもの、あるいは聖なる存在に触れたり、その痕跡を宿しているという、いわゆる聖遺物的要素が求められた⁽¹⁾。キリストや聖母は遺体をこの世に残していないため、遺体そのものが聖遺物になりえず、キリストが磔にされた聖十字架の断片や受難具、聖母の腰帯（図1）や衣服の一部など、^{コンタクト・レリックス}接触型聖遺物にその聖性が宿ると考えられた。一方、諸聖人は、遺体や遺灰、遺骨といった聖遺物、さらに彼らが触れた接触型聖遺物があり、ひいては聖遺物に触れたものもまた聖なる力を分有するとみなされた。

そして「イメージ」もまた、偶像否定を乗り越え神聖なものとして認められるには様々な論拠を必要とした。なかでも求められたのが、人の手になる像ではなく、聖遺物的性格を有する像であった。聖なる存在との接触から奇跡的に生成したり、神意により完成される、いわゆる「アケイロポイエトス（人の手によらない）」と呼ばれる聖像は、まさにこのカテゴリーに属する。キリストの顔を拭いた布にその痕跡から生成した聖顔布マンディリオン（図2）やヴェロ

図1 聖母の腰帯 プラート
サント・ステファノ大聖堂サクラ・チントラ礼拝堂

図2 マンディリオン（コピー）
ジェノヴァ サン・バルトロメオ・ディ・アルメーニ聖堂 制作年不詳
枠：14世紀のビザンティウムの金銀細工師

ニカ、福音書記者聖ルカが描いたとされる聖母像、ニコデモが着手し天使により完成されたルッカの木製磔刑像ヴォルト・サント（図3）など枚挙に暇はない⁽²⁾。聖遺物や聖遺物的イメージは痕跡であるがゆえに、それらを生んだ存在がこの世に実在したことの証拠となるとともに、原罪を負う人間の手になるのではなく神の意志により生成するため、「もの」や「像」を神聖なものに仕立て上げるのだ。他方で、こうした特別の生成譚を持たずとも、自発的に奇跡を起こす聖像も存在する。さらに実体変化した「聖体」^{ホスチア}もまた、キリスト教に固有の聖性を帯びた「もの」に数えられるだろう⁽³⁾。

図3 ルッカのヴォルト・サント
（置き換えられた模刻）

ルッカ サン・マルティーノ
聖堂 ニコデモによって着手
され天使が完成させたという
アケイロポイエトス エルサ
レムからコンスタンティノポ
リス、ローマを経てルッカへ
奉遷

では、「聖なる場」はどうだろうか。すぐに想起されるのは天上のエルサレムだが、地上ではキリストが生きたエルサレム、聖ペテロの墓を祀ったとされるローマ、ビザンティン帝国の首都コンスタンティノポリス、聖ヤコブの遺

体の眠るサンティアゴ・デ・コンポステーラといった聖地が挙げられる。これらがいずれも聖遺物的性格を宿しているように、有名な聖地だけでなく、聖遺物や奇跡像を擁する土地は聖なる場といえるだろう。さらに、聖なる存在が奇跡的に顕現した幻視の場もこの範疇に含めることができる。聖母や天使は往々にして、都市や人里離れた土地、寂しい浜辺、森、河、泉、廃墟に姿を現すが、そうした場は、しばしばキリスト教以前に遡る古代の崇拜の場に重なる⁽⁴⁾。こうした幻視が契機となって、聖堂が建立される、あるいは聖堂の正当化や威厳強化のためにこの種の奇跡譚が後世になって遡及的に練り上げられる現象もよくみられる。

さて、キリスト教における聖なる「もの」と「場」について概観したところで、この両者の関係を掘り下げるために、本論では三つの視点を提起したい。

第一は、「場の模倣（トポミメシス）」。⁵古くからキリスト教世界には、聖なる場の地形を模倣することで新たな神聖空間を複製する現象が認められる。そのモデルとされる場は様々だが、まず挙げるべきものに、旧約聖書「出エジプト記」（25-27）において主がモーセに命じて造らせた聖所と至聖所からなる「幕屋（タベルナクルム）」がある。エゼキエルの幻視に示された神殿（「エゼキエル書」40-43）、さらに聖ヨハネが幻視にみる新たなエルサレム（「ヨハネ黙示録」21-22）とともに、それは、天上のエルサレムを希求する修道院建築が模倣すべき「エグゼンプルム」とされた⁽⁵⁾。興味深いことに、これら三例は、旧・新約聖書の該当箇所において、詳細にすぎるほど各部の計測数値が列記されている。字義通りにそれを再現することは不可能だとしても、寓意的・概念的な模倣対象として想定されていた可能性が垣間見える⁽⁶⁾。一方、地上のエルサレムも模倣の対象として参照された⁽⁷⁾。なかでも聖墳墓聖堂を模倣した聖堂は、コンスタンティノポリスのファロス

礼拝堂テオトコス聖堂や、カール大帝の墓廟を兼ねたアーヘンの宮廷礼拝堂など数多い⁽⁸⁾。さらにテオトコス聖堂も、ビザンティン帝国各地の聖堂やパリのサント＝シャペルに模倣された。また、五世紀頃、ローマが主要なキリスト教聖堂を整備する際にも、エルサレムの地形を模倣したことが指摘されている⁽⁹⁾。中世盛期には、都市をローマに見立て、トポグラフィ的象徴性や形態模倣に訴える例が数多く見られるが、中世後期になると、贖宥によりローマを偏在化させ聖地を創出するという思想が普及する。トポミメシスには、権威ある土地の複製を通じてその威厳に与るという機能だけでなく、エルサレムの地形、聖墳墓、ロレーの家、ポルツイウンコラ、パリのサント＝シャペルなどが模倣される事例においては、聖地に赴けない場合の代替＝擬似巡礼地という性格も指摘できる。15世紀末以降、「新たなエルサレム」として各地に建立された「サクロ・モンテ」も、この問題系では興味深い例といえよう⁽¹⁰⁾。

第二の視点は、近年、ロシアの美術史家アレクセイ・リドフが提唱している「ヒエロトピー」という概念である⁽¹¹⁾。リドフ氏によれば、ビザンティン文化において、造形イメージや聖遺物といった物質的対象は単体として力をもつだけでなく、それらの崇敬対象が融合することで、そのまわりに特別な「神聖空間」、いわば「空間的イコン」が創出されると考えられる。イコンや聖遺物は単なる「もの」であるにとどまらず、教会装飾や典礼というコンテクストにおいて互いに組み合わせられ「魔術的に融合」し、空間へと投射されることで「神聖空間のパラダイム」を生成するという。そして、このトpos化した空間が複製を通じて時空を超えて反復されることで、強力な象徴性や力を帯びた宗教的磁場が増幅されていく。リドフは、こうした現象をビザンティンの人々の心性に根ざすものとしているが、近年、西方も含め広くキリスト教文化圏において再検証されつつある概念である。

そして第三が、「聖なるものの移動」である。聖遺物や聖像にまつわる伝承を繙くなら、そこにはおよそ五つのトposを認めることができる。第一に、聖なるものは、異教徒などの迫害から保護するため、隠されたのち再発見される。これが第一のトpos、「発見 (inventio)」。しかし発見された場で崇敬されることは珍しく、しばしば別の土地へと移動される。マンディリオン (図2) はエデッサからビザンティンの首都へと奉遷され、ヴォルト・サント (図3) もエルサレムからルッカへと神意に導かれて移動する。これが第二のトpos、「移動・奉遷 (translatio)」。そして発見直後から聖像や聖遺物は様々な奇跡を起こすことで真正性を認められ、最終的に崇敬の場に安置され、人々に展覧される。これらが最後の三つのトpos、「奇跡 (miracula)」、「到着・奉挙 (adventus, elevatio)」、「顕示・展覧 (ostensio)」である⁽¹²⁾。本論でとくに注目したいのは、第二のトposである。しばしば伝承に登場するこの聖なるものの空間的移動⁽¹³⁾は、いったいいかなる意味をもつのだろうか。

ここでは、これら三つの視点から聖なる「もの」と「場」の問題を考察する導きとして、中世末からルネサンスのフィレンツェをケース・スタディとしたい。聖なる「もの」としては奇跡を起こす力をそなえた聖母像をとりあげ、その崇敬のトポグラフィに目を向け、

聖なるもの（聖遺物、聖像）が、それに付随するパラテキスト的装置（枠縁、ヴェール、マント、聖遺物容器、タベルナクルム、礼拝堂、等々）や儀礼的行為（宗教行列、聖遺物や聖像の展観）によって、いかに聖なる空間を形成していくかを一考したい。

第1章 インプルネータの聖母像

第1節 流用される聖母像崇敬と聖像譚の重層性

著作家フランコ・サッケッティが1390年頃に著した書簡を繙くなら、当時、トスカーナ地方一帯に聖母崇敬が高揚し、各地に聖母を祀った礼拝堂が建立されたことが窺える⁽¹⁴⁾。しかも、田園の村落チーゴリからサンタ・マリア・デッラ・セルヴァへ、さらに市壁外の農村領域インプルネータからフィエーゾレ、そしてフィレンツェの都市内部へと、崇敬の場は次々に移動し、サッケッティが嘲笑交じりに述べているように、人々はまるで聖堂の聖母の方が別の聖堂よりも力が強いかのごとく、崇敬の場の移動に追随したという（図4）。

こうした現象の背後には、14世紀という時代の危機的状況がある。自然災害やペスト、さらに政治、社会、経済的危機に見舞われたフィレンツェは、従来、都市を守護してきた諸聖人を頼みにするだけでは足りず、新たな守護を聖母に求める機運が高まっていた。さらに、聖母崇敬の場が田園地方の村落やコンタードからフィレンツェの都市部へと移動していくように、田園に根ざす聖母崇敬をフィレンツェがいわば「流用^{アプロプリエート}」していく時代

図4 聖母像崇敬の場の増殖と移動

図6

トスカーナ派？
インプルネータの
聖母 インプルネ
ータ サンタ・マ
リア聖堂 12世紀
1758年頃にイグナ
ツィオ・エンリコ
・ヒュグフォード
によって大幅に描
き直された

図5 ブオンデルモンティの暗殺
アルノ川の橋脚に安置された軍神マルス像
ジョヴァンニ・ヴィッラーニ『年代記』
(ヴァチカン図書館、Chig. L. VIII. 296, c. 44r)

でもあった。折しもフィレンツェは領土拡張政策に乗り出した時期で、征服の対象とした土地の力ある聖像崇敬をも自らの勢力圏に移植することで文化変容をもたらし、やがて到来するメディチ政権を準備する素地を形成しようとしていたのだ⁽¹⁵⁾。

こうした状況をふまえた上で、ここでは、14世紀にインプルネータからフィレンツェへと流用されていく聖母像崇敬に目を向けたい⁽¹⁶⁾。まずその複雑な経緯を追っておこう。

フィレンツェは、古くはエトルリア人によって建設された町だが、都市伝説によれば、執政官カエサルがローマの植民都市として建設した「小ローマ（parva roma）」であるとされ、13世紀以降の年代記には、都市そのものがローマのトポグラフィを模倣して建造されたという伝承も記録され始めた⁽¹⁷⁾。そして古^{いにしえ}よりこの都市には、古代ローマの軍神マルスへの崇敬が息づいていた（図5）⁽¹⁸⁾。ところがアルノ川が氾濫した1333年、ヴェッキオ橋の橋脚に祀られていたマルス神像が失われてしまう。そこで、この軍神がそなえていた軍事的守護や雨を司る役割を同じく託されていた聖像としてインプルネータの聖母像（図6）が再評価され、その崇敬がフィレンツェへと流用され、マルス神崇敬に接ぎ木されることになる。1340年、フィレンツェ共和国は、^{グエルフ}教皇派であったブオンデルモンティ家の庇護下でインプルネータの聖母の^{コンパニーア}信心会を設立、1375年には、聖母の『信心会会則条項（Capitoli della Compagnia della madonna dell' Impruneta）』の「序文（Prolago）」に、教区司祭ステファノ・ブオンデルモンテが公式の聖像譚を執筆し、像の地位を確立させた⁽¹⁹⁾。

聖像譚に目を向けるなら、そこにも先の五つのトポスが認められる。まず、この地方の人々はバーニョロ地区ビフォニカに聖堂を建立しようと望んだが、日中に建立した建築は夜には自ずと瓦解（図7, 8）。そこで子牛に石を牽かせ、神が徴を示される場所を特定し、そこに聖堂を建立することに決定し、現在の教会の場所が示される。この「移動（translatio）」を語る部分から、フィレンツェへと流用される以前に、崇敬の場がビフォニカからインプルネータへと移動していたことが暗示される。その後、人々が土を掘削して

図7 フィレンツェの彫刻家
(パスクイーノ・ダ・モンテプルチャーノ?)
《インプルネータの聖母像の再発見(ステファノの伝説に基づく)》
15世紀半ば 大理石浮彫 インプルネータ聖堂付属美術館(聖母の
テンピエット旧蔵)

図8 図7の部分図
サンテ・マリア山(おそらくバーニョロ地区ビフォニカ)の小礼拝堂 日中に築いた壁が、夜に崩壊、二頭の子牛が石を積んだ牛車を牽く

いると、地中から微かな声が聴こえ、聖母像が「奇跡的に発見(inventio, miracula)」される。そこにインプルネータの聖堂が建立され、聖母像は安置され崇敬を受けることになる(adventus/elevation, ostensio)。さらに本聖像は聖ルカが描いた権威ある聖母像の一枚という地位も付与される。

ところで、聖像譚というものは、五つのトポスにみる一種の定型を踏むだけでなく、既存の物語要素を組み入れつつ、時代を経るなかでさらに別の物語が付加されていくという重層性・可塑性を特徴とする。インプルネータの14世紀の聖像譚にも、16世紀、トレント公会議の時期になって新たな神話が加わる。聖像が地中に埋められた経緯が、初期キリスト教時代の聖人口モロ崇敬と、フィレンツェに隣接する土地「フィエーゾレの神話」に接ぎ木されていくのだ⁽²⁰⁾。いわく、ローマを建国したロムルスとレムスを喚起する聖人口モロや他の聖人たちが聖ペテロによりフィエーゾレに派遣され布教活動を展開した初期キリスト教時代に、この聖像ももたらされた。当時、フィエーゾレのキリスト教者たちは、人里離れたより安全な場とされたインプルネータ地区に参集し、小さな祈禱堂を建設した。しかし、異教徒の迫害が脅威を増すなか、聖堂の破壊を恐れ、聖像を入念に布で巻き地中に埋めたという。ここには、本来はフィエーゾレにまつわる福音の時代にまで遡る権威ある歴史が、後からインプルネータの聖像に流用された経緯を窺うことができる。

ところで、インプルネータには古代エトルリア時代に崇敬された泉が15世紀に発掘され、数々の奉納像が発見されている⁽²¹⁾。その後、泉はすぐに埋められたとはいえ、このことは古代異教時代に遡る泉崇敬という古層のうえにバーニョロ地区ビフォニカの聖母像崇敬が流用・移植され、それがさらに14世紀になってフィレンツェへともたらされ異教のマルス神崇敬に接ぎ木されたという複雑な経緯を暗示している。異教の崇敬をキリスト教化するプロセスとも読めるが、キリスト教化された後にも歴史の古層から古い宗教の水脈が人知れず湧出し続けているとも考えられよう。聖像をめぐる地政学的移動という点でもきわめて興味深い現象であり、この点は今後、聖像譚研究の文脈でもさらに掘り下げていきたい⁽²²⁾。

第2節 聖像行列による空間的アイコンの形成

もっとも、ここで特異なのは、聖母像崇敬がフィレンツェ内部に完全に移植・定着されるのではなく、あくまで聖像自体はインプルネータに保管され、危機的状況の折にフィレンツェに召喚されるという形で崇敬された点である⁽²³⁾。この種の地理的移動を伴う聖像崇敬については機をあらためて考察することとし、ここではコンタードから都市へと都度都度反復される聖像行列に目を転じよう。

聖母像は厳かな行列とともに、インプルネータから数々の教区聖堂に立ち寄り、聖像や聖遺物と邂逅しながらフィレンツェへと運ばれ、都市内部でもフィレンツェの守護聖人たちの聖遺物が聖母を迎えた（図9、10）。聖像と聖遺物との邂逅は、聖母より下位の聖人たちが聖母に崇敬を表すもので、複数の聖なるものが融合することで一時的に神聖な集合体「ヒエロトピー」が形成されることが考えられる。この様子は、さながらミニチュア・パルテノンのごとく霊験あらたかな聖像を数々の聖遺物を取り囲むタイプの聖遺物容器の構造（図11）を、現実の空間へと投射し演出したものともいえる。

聖像行列にはしばしば、別の聖母像も共存した。たとえば1529-30年、神聖ローマ帝国軍によるフィレンツェ占拠の折、フィエーゾレのプリメラーナの聖母（図12）も行列とともに招かれ守護を祈願された⁽²⁴⁾。この聖母には、聖ルカの手により制作され東方からローマに渡り、聖ペテロの弟子である聖ロモロによってフィエーゾレにもたらされたとい

図9 コジモ・モガッリ インプルネータの聖母に他の聖母像や聖遺物が随伴する宗教行列 版画 G. B. Casotti, *Le Memorie Istoriche della Miracolosa Immagine di Maria Vergine dell' Impruneta*, 1714.

図10
アンドレア・アル
ディティ 聖ザノ
ビウスの聖遺物容
器 1330年代
銀 フィレンツェ
大聖堂

図11 《悲しみの
人（イマーゴ・
ピエターティス）
と聖遺物容器
ビザンティン・
アイコン 1300年
頃 聖遺物容器
イタリア 1380
年頃ローマ
サンタ・クロ
チェ・イン・ジェ
ルザレンメ聖堂

図12 ロヴェッツ
ァーノの画家《プ
リメラーナの聖母》
13世紀半ば 板
108×51cm
フィエーゾレ サ
ンタ・マリア・プ
リメラーナ聖堂
(旧サンタ・マリ
ア・インテメラ
ータ聖堂)

図13 ジョヴァンニ・ボニンテンディ《恩寵の聖母》
1490年頃 60x35cm サンタ・ブリジーダ（ポンタッシーエヴェ） サンタ・マリア・デッレ・グラーツィエ・アル・サッソ聖堂
1515年の財産目録から、1504年の聖堂落成式祝典の際にサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂聖母マリア下僕修道会からサッソの建物管理部に寄付されたとされる

図15 フラ・アンジェリコ聖遺物容器（星の聖母）
1427年頃 フィレンツェサン・マルコ美術館（サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂旧蔵）

図14 インプルネータの聖母 行列用タベルナクルム 1350－1360年頃 聖母のマント

う伝説がある。先に見たように、16世紀にインプルネータの聖像譚に付加された要素は、まさにこの聖母像の由来を流用したものだったことが分かる。さらに1542年には、近郊ムジェッロで起きた地震の際に、フィエーゾレ近郊ポンタッシーヴェのサンタ・ブリジーダ聖堂の聖母（図13）がフィレンツェに招来されている⁽²⁵⁾。危機の折には、聖母のより強力な力を祈願すべく複数の聖母像が召喚された様が浮かび上がってくる。

聖母の守護力は、像を収める行列用タベルナクルムの上に幾重にも重ねられたマンテッリーニ（図14）にも象徴されたことだろう⁽²⁶⁾。1430年代の記録には、聖母像が頻繁に都市に到来することでその庇護力が低下することを危惧して隠す方針が示されている⁽²⁷⁾。聖像が隠されていく一方で、壮麗なタベルナクルムやマンテッリーニがいつそう華美になる現象は、聖遺物と聖遺物容器の関係（図15）を髣髴させる。人々の目から隠され不可視の領域に潜む聖遺物や聖像の力を視覚化する一つの手段が、聖像に付随するこうしたパラテキスト的装置にほかならない。

第2章 「聖像」と「パラテキスト的装置」と「場」による神聖空間の形成

第1節 神聖空間の形成と模倣

この種の付随的要素に注目しつつ、次に聖母像とそれが安置される場との関係に目を向けよう。インプルネータに安置されるとき、聖母像は壁龕に覆われ人目に触れることな

図16 設計者不詳 聖母のテンピエット
テラコッタ装飾：ルカ・デッラ・ロッビア
1460年代 インブルネータ サンタ・マリア聖堂

図17 ミケロッツォ・ディ・バルトロメオ（設計）
パーニョ・ディ・ラーボ・ポルティジャーニ（建設）
受胎告知の聖母のテンピエット 1448年完成
フィレンツェ
サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂

く、いわば都市に赴く際のために力を蓄えているわけだが、その不可視性を埋め合わせるべく、いかに聖像を取り囲むパラテキスト的装置が神聖空間を生成させ、さらには崇敬を管理するフィレンツェの存在を喚起するかを考察しよう。

〈奇跡像と古代風テンピエット〉

インブルネータの聖堂に目を向けると、聖母像はルカ・デラ・ロッビアの彩釉テラコッタによる聖ペテロと聖パオロを両脇に従えた古代風聖龕に収められ、さらに古代風テンピエットによって荘厳されている（図16）⁽²⁸⁾。15世紀、教区司祭アントニオ・デリ・アーリ、インブルネータの聖母信心会、ブオンデルモンティ家が核となって聖堂の装飾・美化を推し進めるなか、この礼拝堂空間も整備されたと考えられる。

なかでも見逃せないことに、このテンピエットは、メディチ家のピエロ・ディ・コジモが父コジモの親友でもあった建築家ミケロッツォ・ディ・バルトロメオに設計させた、フィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の古代風テンピエット（図17）ときわめて類似する外観や構造を示している。聖母使僕修道会が管理するこの聖堂は、1360年代頃から、ファサード左内壁に描かれていた受胎告知の聖母像（図18）が数々の奇跡を起こすという現象を喧伝しはじめ、たちまち諸外国の著名人までが詣でる国際巡礼地となった。1361年、教皇イノケンティウス6世は礼拝堂を訪

図18 作者不詳《受胎告知》
1325-1360年頃 フレスコ フィレンツェ
サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂 ファサード左内壁

図19

左：〈メディチ家礼拝堂＋《受胎告知》
＋テンピエット〉
フィレンツェ サンティッシマ・
アヌンツィアータ聖堂

右：〈礼拝堂＋聖母像＋テンピエット〉
インプルネータ サンタ・マリア
聖堂

れる者に贖宥を認めており、1370年には祭壇が正式に聖別され、14世紀末になると、聖母への奇跡の祈願や感謝から膨大な数の奉納物が捧げられる。この聖堂が、蠟や銀で身体部位をかたどった奉納物から、蠟製マスクや奉納者自身の衣服を身につけた等身大奉納人形までが集積する奇跡の劇場と化したことはすでに別の個所で詳細に論じたのでここでは扱わない⁽²⁹⁾。15世紀半ば、ピエロが礼拝堂庇護権を得てこの崇敬をさらに強化していくなかで、さらに公式の聖像譚が形成されていく。いわく、この聖像は「聖母に格別の崇敬を抱いていた慎み深く高潔で慈愛に満ちたバルロンメーオという名の男」が描き始めたが、「その御顔の真の肖像を素描することができず」、天使の手によって完成された。つまり天使が完成させたアケイロポイエトスという地位を確立させる。さらに1464年には、ジョヴァンニ・バッティスタによる「福音書記者聖ルカの聖母像」一覧にも登録された。

ルネサンス期のフィレンツェにおいて、国際的な知名度を誇ったこの奇跡像を祀る礼拝堂の庇護権をピエロが獲得して以後、像の周りには神聖空間が整えられていく（図19左）。1448年、ピエロがミケロッツォに注文した大理石製テンピエット（図17）が完成。さらに、ピエロは礼拝堂に並ぶように建立された第一祈禱堂を獲得、高価な銀の小型奉納物を、フラ・アンジェリコとアレッソ・バルドヴィネッティによって装飾された扉付収納棚に収めた⁽³⁰⁾。そして新しいテンピエットの周りには金属網が巡らされ、人々が聖像に近づくことを妨げた。15世紀半ば以降、聖像は重要な聖母の祝日や例外的な場合にだけ展覧されたが、通常は人目に触れず隠された。「複製」を通じて像に接近することも、この崇敬にメディチ家が関わり始めた時期に制限され、複製制作の権利がコントロールされた。

ここで注目したいのが、こうして構築された神聖空間の構造がまさにインプルネータの聖母の周りに反復されている点である⁽³¹⁾。テンピエット（図16）は、インプルネータの細部表現がやや粗雑であるため、ミケロッツォ自身の設計ではなく、サンティッシマ・アヌンツィアータのもの（図17）を模倣したと考えられるが、その構造はきわめて類似している。さらに両礼拝堂には、テンピエットに囲まれた礼拝堂に隣接するもう一つの礼拝堂を擁しており、その空間配置も重なる⁽³²⁾（図19右）。隣接する空間は、フィレンツェの

図20 フィレンツェ派(?)
「サン・ジョヴァンニ・グアルベルトの十字架磔刑像」13世紀(?) 板
フィレンツェ
サンタ・トリニタ聖堂(サン・ミニアート・アル・モンテ聖堂
旧蔵)

図21 パーニョ・ディ・ラーボ・ボルティジャーニ、ミケロッツォ・ディ・バルトロメオ(帰属) ルカ・デッラ・ロbbiea ピエロ・デ・メディチの注文
「サン・ジョヴァンニ・グアルベルトの十字架磔刑像」のタベルナクルム 1447年頃-1450年
フィレンツェ
サン・ミニアート・アル・モンテ聖堂

キオストロ・ディ・ヴォーティ
場合は奉納物の回廊上の専用通路から通じるメディチ家の礼拝堂であったが、インプルネータの場合は注文主も用途もわかっていない。受胎告知の聖母は、フィレンツェ以外の人々にも奇跡をもたらした国際的な名声を誇ったのに対して、インプルネータの聖母は通常はコンタードに保管され、その力はおそらくフィレンツェ市民のために発揮されるという違いはあるが、いずれも中世末からルネサンスの様々な危機的状況で守護を祈願された二つの聖母像の周りに古代風のテンピエットが設置され、隣接する祈禱堂が併設されている構造は看過しえない。この時期、ピエロはさらにフィレンツェのサン・ミニアート・アル・モンテ聖堂内の奇跡を起こす十字架像、通称「サン・ジョヴァンニ・グアルベルトの磔刑像」(図20)にも、ミケロッツォによる古代風テンピエット(図21)を設置させている⁽³³⁾。ともに当時、奇跡を起こすことで格別の崇敬を集めていた聖像を擁する場に、ほぼ同時期に「ブルネッレスキ以後の時代の最も有能な建築家」とヴァザーリ(『芸術家列伝』第2版、1568年)に謳われたミケロッツォによる古代風テンピエットを設置するという現象が人々に与えたインパクトたるや、いかほどだっただろうか。ブルネッレスキやミケロッツォが模索した古代風様式の建築は、彼らにとっては「蛮族」のものとみなされたゴシック様式ではなく、「小ローマ」たるフィレンツェの起源に立ち返り、キリスト教初期の真正な様式という意味づけがなされていたのだろうか。礼拝価値と芸術価値とが交差するかにみえるこの神聖空間の構造から、互いに類似する空間構造(奇跡像+古代風タベルナクルム+隣接礼拝堂)をそなえることで、受胎告知の聖母とインプルネータの聖母の関係をフィレンツェという文脈で緊密に関連づけ、その奇跡力を^{インターテクスチュアル}間テクスツ的、あるいは^{インターヴィジュアル}間視覚的に増幅・共振させようとする動きをみることは、あながち不適切ではないのではなかろうか。

〈奇跡像+聖遺物〉の対構造と〈身廊頭部〉という場

しかし、インプルネータの聖母礼拝堂の着想源はおそらくそれだけではない。ここで少し引いて聖堂(図22)を眺めるなら、聖母礼拝堂ともう一つの礼拝堂が、アプシスを背に身廊頭部左右に対をなして配置されるという構造が認められる。この聖堂は1944年に空襲を受け、1950年に再建されたが、空襲以前の写真(図23)にもこの構造ははっきり

図22 インブルネータのサンタ・マリア聖堂内観
(1944年7月28日に空襲を受け、再建、1950年
献堂式)

図23 インブルネータのサンタ・マリア聖堂内観
(1944年7月28日の空襲前)

図24 真の十字架の聖遺物
(傭兵隊長ピッポ・スパーノが奉納)
のタベルナクルム インブルネータ
サンタ・マリア聖堂

図25 サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂
(5世紀前半)の17世紀の立面図
Paolo de Angelis, *Basilicae s. Mariae Maioris
de Urbe a Liberio Papa I usque ad Paulum V
Pont. Max. descriptio et delinatio*, Roma, 1621.

図26 左上：聖ルカの聖母のためのタベルナクルム
左下：聖ルカの聖母 6世紀(?)
右：サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の17世紀の平面図
Paolo de Angelis, *Basilicae s. Mariae Maioris de Urbe a Liberio Papa
I usque ad Paulum V Pont. Max. descriptio et delinatio*, Roma, 1621.

と見ることができる。きわめて類似するテンピエットの中に聖母と対に祀られているのは、真の十字架の聖遺物（図24）。奇跡像と聖遺物を身廊頭部に対置するという空間構造に着目するなら、そこにもまた、キリスト教文化においてきわめて重要な聖堂との関わりが浮上してくる。ローマの四大バシリカ聖堂のひとつ、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂のかつての内観（図25）を髣髴させるのだ⁽³⁴⁾。そこでもまた、14世紀初頭以降、身廊頭部に対に配された二つの礼拝堂のうち、左には聖ルカの手になるという有名な聖母像が祀られ、右にはキリストの飼葉桶の木片や産着の断片を含む聖遺物コレクションが納められていた⁽³⁵⁾（図26）。ローマの権威ある聖堂が示す聖像と聖遺物とタベルナクルムが複合的に織りなすヒエロトピーの権威を借りることで、インプルネータの聖母像の地位を視覚的に保証する空間が生み出されていると考えられよう。

さらに聖堂を俯瞰してみよう（図22）。インプルネータの聖堂アプシスには、教区司祭ステファノ・ブオンデルモンティ（後のフィレンツェ司教）が1375年に注文した多翼祭壇画（図27）が設置されている⁽³⁶⁾。ステファノといえ、インプルネータの聖母崇敬をフィレンツェに移植し公式伝説を確立させた立役者にほかならない。彼の注文になる祭壇画の中央軸に着目すると、下から「聖母子」、「聖母の御眠り」、「被昇天」、「戴冠」が描かれている。この図像配置と選択が、やはりローマのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂のアプシスにモザイクで表現された図像（図28）と重なる⁽³⁷⁾。一世代前に描かれた多翼祭壇画をアプシスに配置し、身廊頭部に聖像と聖遺物を擁する礼拝堂を左右に対に設置するという15世紀の構想は、ローマの権威ある「聖ルカの聖母」と聖遺物の神聖空間を喚起するものであり、加えてフィレンツェの受胎告知の聖母のための古代風テンピエットを模倣することで、古代ローマとの二重のつながりを視覚的に示すものといえようか。インプ

図27 ピエトロ・ネッリ トンマーズ・ディ・マルコ・デル・マッツァ 《聖母子と諸聖人、聖母の御眠り、聖母の戴冠》インプルネータサンタ・マリア聖堂 主祭壇
1375年教区司祭ステファノ・ブオンデルモンティ（後のフィレンツェ司教）により注文
1944年の爆撃後、修復・再構成

図28 ヤコポ・トッリーティ
《聖母の御眠り 聖母戴冠》1295年 ローマ
サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂
アプシス・モザイク

ルネータというコンタートに保管されながらも、あくまでフィレンツェの聖母崇敬のコスモロジーに参入した聖母像は、こうしたパラテキスト的構造によってフィレンツェの徴を刻印されるとともに、ローマに並ぶ神聖空間を巡礼者や信者たちに印象づける役割を託されていたと考えられるのではないだろうか。

第2節 プラートの聖帯、インプルネータの聖母、受胎告知の聖母の間テキスト的關係

この文脈でもうひとつ目を向けておきたい事例がある。インプルネータの多翼祭壇画には、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂には不在の図像が存在する。それは、「聖母被昇天」に組み合わせて描かれた「聖トマスへの聖母の聖帯授与」（図27, 30左）である。腰帯（図1）は、伝承によれば、聖母の死に立ち会うことのできなかった聖トマスに聖母が授与した聖遺物である。聖トマスはそれを敬虔な男に託し、代々、その子孫へと受け継がれたが、ある末裔の娘マリアと結婚したプラート出身の聖地巡礼者ミケーレにより1141年に聖地からプラートにもたらされ（*translatio*）、一連の奇跡（*miracula*）を起こし、とくに13世紀末以降、多くの巡礼を集めた⁽³⁸⁾。プラートは1351年、コムーネとしての独立を失いフィレンツェ共和国の統治下に入った。そして、プラートの誇るこの聖遺物をフィレンツェの聖母聖堂の勢力圏に導こうとする動きがあったことも指摘されている⁽³⁹⁾。1375年に注文されたインプルネータの祭壇画に描かれた聖帯授与の場面は、フィレンツェが近隣の聖母崇敬を流用しようとする経緯の一環に位置づけられるのではないだろうか⁽⁴⁰⁾。

聖帯を祀るプラートの礼拝堂は、こうした経緯を考察するうえで興味深い様相を呈している。1385-90年にこの聖遺物を安置するためのサクラ・チントラ礼拝堂がサント・ステファノ大聖堂ファサード内壁左に建設され、92-95年にジョット派の画家アーニョロ・ガッディによって聖母伝と聖帯伝が壁面に装飾された⁽⁴¹⁾。このなかでも礼拝堂の正面（北）壁に、インプルネータの多翼祭壇画と同じく、下から「聖母の御眠り」、「被昇天と聖帯の授与」、「戴冠」が描かれていることは看過しがたい（図29）。これらの場面選択は、聖母伝のクライマックスを飾る表現として珍しくないという指摘もあるかもしれない。また、両者に類似する「聖帯の授与」の表現（図30）は、フィレンツェで定型化され、プラートでは1330年代以降に採用された類型であり、視覚的類縁性はより広い視野から考察する必要もあろう⁽⁴²⁾。しかし、ガッディの聖母伝にみられるもう一つの場面に目を向けることで、この礼拝堂がわれわれの文脈にとって意味深いものであることが確証されるのではないだろうか。

それとは、礼拝堂の西壁面、ちょうど聖堂のファサード左内壁に描かれた「受胎告知」（図31）である。これは、先にみたサンティッシマ・アヌンツィアータの受胎告知の聖母（図18）を模倣したものにはかならない。14世紀後半から15世紀初頭にかけて、この「受胎告知」は都市内外で数多くの複製が制作された。1375年頃に制作されたプラートの聖母使僕修道会系サント・スピリト聖堂、フィレンツェのサン・マルコ聖堂、サンタ・マリ

図29 アーニョロ・ガッディ
聖母伝と聖帯伝
1392－1395年 プラート
サント・ステファノ大聖堂
サクラ・チントラ礼拝堂

図30 聖トマスへの聖帯の授与
左：図27の部分（インプルネータ） 右：図29の部分（プラート）

図31 アーニョロ・ガッディ《受胎告知》
1395年までに完成 フレスコ プラート
サント・ステファノ大聖堂サクラ・チント
ラ礼拝堂 ファサード左内壁 最下層北側

図32 サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂
の《受胎告知》と平面図

ア・ノヴェッラ聖堂の例をはじめ、ロレンツォ・モナコ（サンタ・トリニタ聖堂）、ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ（ヴァティカン絵画館）、フラ・アンジェリコ、ネーリ・ディ・ピッチ（サンタ・トリニタ聖堂）、ヤコポ・ベッリーニ（サンタレッサンドロ聖堂、ブレーシャ）、ヤン・ファン・エイク（ゲント祭壇画）と数知れない⁽⁴³⁾。しかも興味深いことに、複製のうち少なくとも初期の4作（フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂、オンニサンティ聖堂〔現在は食堂に移動〕、サンタ・マリア・ウーギ聖堂〔現存せず〕、そしてプラートのサント・スピリト聖堂）は、原作（図32）と同じ中央門左ファサード内壁に描かれた。フィレンツェのサン・マルコ聖堂では、ファサード右内壁に描かれている。ファサード内壁は、「キリスト伝」を主題とする装飾の起点として「受胎告知」を表現するのに適した場であり、一般的にも教会内で在俗信徒がもっとも接近しやすい領域で、民衆的崇敬に適していた。しかし描かれた場がいずれも一致することは、原作と複製との関係を考える上で看過しえない。そもそも中世キリスト教文化において、聖遺物や崇敬像の奇跡力は「接触」によって伝達されるという信念が存在した。複製と、それが描かれたファサード内壁との「接触」は、アヌンツィアータのオリジナルの崇敬像と関わる「場の記憶」を活性化し、複製を息づかせ、それらが分有する力を高めたとは考えられないだろうか⁽⁴⁴⁾。

この文脈で意味深いのが、フィレンツェのサンタ・フェリチタ聖堂である。ここは、マ

ニエリスム初期を代表するヤコポ・ダ・ポントルモの《受胎告知》と《十字架降下》のあるカッポーニ礼拝堂で有名だが、実はカッポーニ以前にバルバドーリ家が管理をしていた時代には、ファサード右内壁にサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の受胎告知の14世紀の複製が描かれていた⁽⁴⁵⁾。カッポーニが本礼拝堂を「受胎告知の聖母」から「ピエタ」へと献堂し直して以後も、ポントルモが同じファサード内壁面に「受胎告知」を重ね描きしたことは、奇跡的力を宿す場と聖像とが取り結んできた関係性に照らしてみると、その意味を再考する必要があるのではないだろうか⁽⁴⁶⁾。

さらにファサード内壁といえ、右側ではあるが、ヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂にかつて祀られていた聖顔布ヴェロニカの安置された場でもある（図33）。フィレンツェに戻るなら、旧サンタ・レパラー

図33 ヴァティカン市国 サン・ピエトロ大聖堂
古い平面図

ソラッテ山のサンタンドレア修道会修道士ベネデット編纂『年代記』によれば、教皇ヨハネス7世（705-707）がサン・ピエトロ聖堂の「ヴェロニカと呼ばれる場所に」聖母に献納した祈禱堂を建立させた。古いバシリカの身廊を取り壊す際に破壊されたこの祈禱堂は、聖堂内部、ファサード内壁右側に配置されていた。

タ聖堂南身廊壁に描かれていたフレスコ画「キエリチの聖母」が14世紀末には数他の奇跡を起こし崇敬を集め、1412年、サンタ・マリア・デル・フィオーレという名で聖堂が聖母に奉献される刷新を契機にタベルナクルム礼拝堂に設置され、中央門と南門の間のファサード内壁に設置されたことも意味深い⁽⁴⁷⁾。こうした特定の場のもつ聖性が絵画を描く場の選択に関与していた可能性は、今後、さらに多くの事例の検証とともに掘り下げていきたい。

プラートに立ち返るなら、フィレンツェの《受胎告知》の複製をフィレンツェの画家アーニョロ・ガッディが同じファサード左内壁に反復するという現象は、トスカーナの二つの強力な聖遺物と聖像とを視覚的に結びつけることを意味しているともいえる。すでに崇敬の確立していたプラートの聖遺物と、フィレンツェの新興の奇跡像とを融合させることで、受胎告知の聖母像の威信を高めるとともに、ローマの聖遺物と聖像の集合体に並ぶ地位を主張しうる神聖空間の構築をトスカーナがめざしたと解釈することもできるだろう。

しかし一方で、当時のフィレンツェとプラートとの関係を思い起こすなら、1351年以降、フィレンツェ共和国の政治的支配下に入ったプラートの聖遺物をフィレンツェの聖母聖堂の勢力圏に導き、それにより聖帯崇敬にフィレンツェの徴を刻印しようとする企ての一環であった可能性も浮かび上がってくる。ついに成功することはなかったとしても、フィレンツェによるプラートの聖遺物崇敬の「流用」、「フィレンツェ化」の痕跡をここにみる可能性が残されている。

おわりに

以上の経緯をまとめよう。

14世紀後半、フィレンツェ共和国では領土拡張政策のなかで、コンタードや近隣都市で巡礼を集めていた力ある聖像や聖遺物を流用する動きが高揚した。都市内外で、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の聖母像が、奇跡を起こしはじめた場であるファサード内壁と同じ場に複製されることで、力ある聖像の権威に与る聖なる場が増殖するとともに、各地にフィレンツェの徴が刻印されていった。インプルネータの聖母崇敬はフィレンツェへと流用され、トスカーナのもっとも神聖な聖遺物のひとつであるプラートの聖母の聖帯もフィレンツェの聖母崇敬の圏域に近づけようとする企てのなかで、遠く離れた複数の礼拝像と聖遺物とが相互に^{インターテクスチュアル}関係を取り結びつつ、フィレンツェの徴とともにその力を補強しあい、ローマに匹敵するヒエロトピーがトスカーナに形成されようとしていた。

その文化変容を受けて、メディチ家支配下の15世紀には、今や国際的に奇跡力を誇るまでになったフィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータの聖母と、フィレンツェの恩寵のシンボルとしての地位を確立させたインプルネータの聖母に、視覚的に類似する古代風タベルナクルムが付加され、強力な二つの聖母の関係が^{インターヴィジュアル}間視覚的に強調される。

図34 サンティッシマ・アヌンツィアータ
聖堂の現在の平面図

1440年代のミケロッツォの聖堂再建構想
集中式のトリブーナに柱廊を設ける構想
＝エルサレムの聖墳墓聖堂を模倣？
前廊柱廊（アトリウム）＝カエサレイア
司教エウセビオス（260頃-339頃）『教会史』第10章に基づく？

エルサレムの聖墳墓聖堂復元図

さらにインプルネータでは、聖像と聖遺物との対構造と、聖母伝の三場面（「御眠り」、「被昇天」、「戴冠」）とを複合的に組み合わせた神聖空間を、ローマの「聖ルカの聖母」を擁するサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂のパラテキスト的装置を髣髴させる形で形成することで、神聖な力を宿した磁場としての権威を高め、ローマに並ぶ都市としてフィレンツェの威信を視覚化した。

フィレンツェ都市内にあったサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂とはいえば、古代風タベルナクルムに加え、同時期の1444年、ミケロッツォはピエロ・デ・メディチの庇護のもと、聖堂の改築計画にも参与しており、その際、おそらくはカエサレイア司教エウセビオス（260-339）の『教会史』第10書の記述を基に、初期キリスト教時代の建築を示唆する前庭柱廊^{アトリウム}を構想するとともに、特異なトリブーナの建設を予定していた⁽⁴⁸⁾（図34）。このトリブーナは円形で、放射状のエクセドラを配し、ドームを支える円柱群がエクセドラにアクセスする周歩廊に囲まれて立つ構造だったと考えられ、一説にはエルサレムの聖墳墓聖堂を祖型としたとされている。とするならば、この時期、本聖堂が初期キリスト教時代に遡る古代様式と聖地エルサレムの聖墳墓聖堂のトポミメースに訴えることでも、聖堂の威信を高めつつあったことが窺える。

このように、キリスト教文化において、聖なるものは単体で作用したのではなく、他の力ある聖像や聖遺物、さらにそれらを演出するパラテキスト的装置との複合体として機能し、ひとたびその複合体がエグゼンプリウムとしての権威を得るや、同じ構造を模倣することで間視覚的に力を補強し合うヒエロトピーが各地に複製・反復されていった様相が浮かび上がってくる。近年、15、16世紀に、集中式プランをもつ聖堂建築が奇跡を起こす聖母像崇敬の新たな巡礼地として隆盛してきた現象が指摘されている⁽⁴⁹⁾。ジュリアーノ・ダ・サンガッロの設計したプラートのサンタ・マリア・デッレ・カルチャーリ聖堂、トーディのマドンナ・デッラ・コンソラツィオーネ聖堂、アントニオ・ダ・サンガッロ（父）

の設計したモンブルチャーノ郊外マドンナ・ディ・サン・ビアジオ聖堂といったルネサンスの集中式建築は、いずれも新たに奇跡を起こした聖母像のために建立されている。巡礼路聖堂のこうしたプランだけでなく、聖遺物や奇跡像などを安置した巡礼者の集まる格別重要な場もまた、相互の形式的類似性を強めることで信者の記憶に訴え、神聖な存在の宿る場を喚起したと考えられる。

以上の考察から、キリスト教文化において、聖像譚が「発見」、「移動・奉遷」、「奇跡」、「到着・奉挙」、「顕示・展観」という五つのトポス＝型を踏襲しつつも、既存の様々な伝承から物語要素を抜き出しまとめたパスティーシュから構成されるテキストであったように、聖像を演出する空間もまた、権威ある別の空間構成をエグゼンプリムとして模倣するトポミメーシスによって、^{インターテクスチュアル}間テキスト的な関係性を形成しつつ神聖性を求めようとした態度が浮彫となった。本論では、14、15世紀のトスカーナ地方に限定した考察にとどまったが、今後、より広い文脈からこの問題を再検証したい。

註

- (1) 聖遺物については、秋山聰『聖遺物崇敬の心性史——西洋中世の聖性と造形』講談社、2009年、およびその巻末参考文献を参照。
- (2) 拙著『キリストの顔——イメージ人類学序説』筑摩書房、2014年。「聖ルカの聖母」についての包括的研究としては、Michele Bacci, *Il pennello dell'Evangelista: Storia delle immagini sacre attribuite a san Luca*, Pisa: Gisem-Ets, 1998、ルッカのヴォルト・サントについては、拙論「イメージの記憶——ルッカのヴォルト・サントの図像変容とジェンダー・シフト」『UP』497号、東京大学出版会、2014年、22-30頁、およびジャン＝クロード・シュミット『中世の聖なるイメージと身体——キリスト教における信仰と実践』小池寿子訳、刀水書房、2015年、209-264頁を参照。
- (3) 聖体崇敬については、とくに以下を参照。Miri Rubin, *Corpus Christi: The Eucharist in Late Medieval Culture*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- (4) 拙著『イメージの地層——ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』名古屋大学出版会、2011年、第5章参照。
- (5) Mary Carruthers, *The Craft of Thought: Meditation, Rhetoric, and the Making of Images, 400-1200*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, chap. 5, The Place of the Tabernacle, pp. 221-276.
- (6) 15世紀末から「第二のエルサレム」として各地に建造されはじめる「サクロ・モンテ」もまさに「場の模倣」を特徴とした擬似巡礼地だが、最初の構想者フランチェスコ厳修会士ベルナルディーノ・カイーミは、自らの足でエルサレムを計測し、それを北イタリアのピエモンテ州ヴァラッロの地に再現させたことを強調している。拙著『イメージの地層』（前掲書）第4章参照。こうした「計測」は字義通りに取ることはできないとしても、「場の模倣」による神聖空間の複製という文脈において重要な要素であったと考えられ、今後、さらに広い文脈で掘り下げたいと考えている。

なお、「場の模倣」という問題系においては、物理的に建設される建造物だけでなく、心のなかに構築される建築や都市も視野に入れる必要がある。たとえば中世の記憶術を専門とするメアリー・カラザーズは、古来の建築的記憶術において、心のなかに築いた場（locus）には各自が記憶すべきイメージ（imagines agentes）が刻印されているので、同じ建築や場のレイアウト、プラン、細部を反復することは、この記憶術に基づく想起や瞑想においても重要であると指摘している。Mary Carruthers, *The Craft of Thought*, op. cit., p. 256.

- (7) エルサレムおよびそのトポミメシスについては以下を参照。 *Jérusalem et la mémoire de la Passion*, sous la direction de Véronique Dalmasso, Paris: Éditions Le Manuscrit, 2009; Alexei Lidov, “New Jerusalem: Transferring of the Holy Land as Generative Matrix of Christian Culture”, in *New Jerusalem: Hierotopy and Iconography of Sacred Spaces*, ed., A. Lidov, Moscow: Indrik, 2009, pp. 5–10; Annette Hoffmann and Gerhard Wolf, ed., *Jerusalem as Narrative Space/Erzählraum Jerusalem*, Leiden-Boston: Brill, 2012; Lucy Donkin and Hanna Vorholt, ed., *Imagining Jerusalem in the Medieval West*, Oxford: Oxford University Press, 2012; Anna Benvenuti e Pierantonio Piatti, a cura di, *Come a Gerusalemme: Evocazioni, riproduzioni, imitazioni dei luoghi santi tra medioevo ed età moderna*, Firenze: SISMEL, 2013.
- (8) Earl Rosenthal, “‘Copy’ of the Holy Sepulchre”, in *Journal of the Society of Architectural Historians*, 17, no. 1, 1958, pp. 2–11.
- (9) Christian C. Sahner, “Hierusalem in Laterano: The Translation of Sacred Space in Fifth Century Rome”, in *New Jerusalem: Hierotopy and Iconography of Sacred Spaces*, op. cit., pp. 103–130.
- (10) 拙著『イメージの地層』（前掲書）第4章参照。さらに以下も参照。Michele Bacci, “Performed Topographies and Topomimetic Piety. Imaginative Sacred Spaces in Medieval Italy”, in *Spatial Icons: Performativity in Byzantium and Medieval Russia*, Moscow: Indrik, 2011, pp. 101–118.
- (11) Alexei Lidov, “The Flying Hodegetria: The Miraculous Icon as Bearer of Sacred Space”, in *The Miraculous Image in the Late Middle Ages and Renaissance*, ed., Erik Thunø and Gerhard Wolf, Rome: L’erma di Bretschneider, 2004, pp. 291–321 [“Spatial Icons: The Miraculous Performance with the Hodegetria of Constantinople”, in *Hierotopy: Creation of Sacred Spaces in Byzantium and Medieval Russia*, ed., Alexei Lidov, Moscow: Indrik, 2006, pp. 349–372; 「空間的アイコン——コンスタンティノポリスにおけるホデゲトリア・アイコンによる奇跡の儀式」 秋山聰訳、『西洋美術研究』第15号、2009年、40–63頁]; Id., “The Miracle of Reproduction: The Mandyllion and Keramion as a Paradigm of the Sacred Space”, in Christoph L. Frommel e Gerhard Wolf, a cura di, *L’Immagine di Cristo dall’Acheropita alla mano d’Artista dal tardo medioevo all’età barocca*, Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana, 2006, pp. 17–42; Id., “Holy Face, Holy Script, Holy Gate: Revealing the Edessa Paradigm in Christian Imagery”, in Anna Rosa Calderoni Masetti, Colette Dufour Bozzo, Gerhard Wolf, a cura di, *Intorno al Sacro Volto. Genova, Bisanzio e il Mediterraneo (secoli XI–XIV)*, Venezia: Marsilio, 2007, pp. 145–162 [「キリストの聖なる像、聖なる手紙、聖なる門——キリスト教文化における「イメージ・パラダイム」の一例」 伊藤拓真訳、『死生学研究』10号、284–318頁]; Id., *Hierotopy: Spatial Icons and Image-Paradigms in Byzantine Culture*, Moscow: Theoria, 2009; Id., ed., *New Jerusalem*, op. cit., 2009; 拙著『キリストの顔』（前掲書）第4章参照。
- (12) 聖遺物譚や聖像譚のトポス・型については、以下を参照。M. Heinzelmänn, *Translationsberichte und andere Quellen des Reliquienkultes*, Turnhout: Brepols, 1979, pp. 52–53.
- (13) 聖像や聖遺物の「移動」についての考察は今後掘り下げる必要があるが、この問題についてはたとえば以下を参照。Jean-Claude Schmitt, “Translation d’image et transfert de pouvoir. Le crucifix de pierre de Waltham (Angleterre, XI^e–XIII^e siècle)”, in *Les images dans les sociétés médiévales: Pour une histoire comparée*, Jean-Marie Sansterre et Jean-Claude Schmitt, éd., *Bulletin de l’Institut Historique Belge de Rome*, 69, 1999, pp. 245–264 [ジャン＝クロード・シュミット『中世の聖なるイメージと身体』（前掲書）、192–208頁]。
- (14) Franco Sacchetti, Lettere, in *I sermoni evangelici, le lettere ed altri scritti inediti o rari di Franco Sacchetti. Raccolti e pubblicati con un discorso intorno la vita e le sue opere per Ottavio Gigli*, Firenze, 1857, pp. 218–219. 以下に一部訳出する。「[……] わが町では、聖母（ノストラ・ドンナ）の像だけでもどれだけ変化してきたことでしょう！ かつては、サンタ・マリア・ダ・チーゴリに誰もが駆けつけたものです。次にサンタ・マリア・デッラ・セルヴァに向かいました。その後、サンタ・マリア・

イン・プルネータの名声が高まりました。次いでフィエーゾレのサンタ・マリア・プリメラーナ、そしてオルト・サン・ミケーレの聖母（ノストラ・ドンナ）へと向かい、その後はいずれも見棄てられ、誰も彼もが使僕修道会の受胎告知の聖母へと集いました。[……] この聖母には、様々な仕方で、多くの〔奉納〕像が置かれたり吊るされたりしたので、少し前に壁を鎖で補強していなければ、危うく屋根もろとも倒壊するところでした。今ではとうとう、キリストの墓を模して造られたルバコンテ橋のサンタ・マリア・デッレ・グラーツィエと呼ばれる小さな祈禱堂に人々はこぞって赴いています。そこは狭い場所なので、日ごと蠟を取り外しては、新たな蠟のための場所を設ける必要があるようです。こうして人々は、神がいかほどご承知か、まるで、ある場所の方が別の場所よりも聖母の恩寵をほどこす力が強いのかのごとく、罪を浄めるのです。おお、愚かな輩よ、こうしたことすべてはわれわれの心のうちにあるのであって、きちんと覚悟をすれば、いつでもどこでも聖母は〔恩寵をくださる〕準備をされているというのに！」

この時期にトスカーナに聖像崇敬が高揚した一因としては、1305年から1378年の間、ローマに教皇が不在であったことも指摘されている。Megan Holmes, *The Miraculous Image in Renaissance Florence*, New Haven & London: Yale University Press, 2013, p. 45. ホームズは、著者と共通の関心の下ではほぼ同じ時期にルネサンス期フィレンツェの奇跡像や崇敬の推移を調査しており、上掲書はより網羅的かつ包括的なフィールドワークのきわめて示唆深い成果といえる。

- (15) David Friedman, *Florentine New Towns: Urban Design in the Late Middle Ages*, Massachusetts: MIT Press, 1988.
- (16) Richard C. Trexler, “Florentine Religious Experience: The Sacred Image”, in *Studies in the Renaissance*, XIX, 1972, pp. 7-41. さらにこの聖母についての基本的研究としては以下も参照。Giovannibattista Casotti, *Memorie storiche della miracolosa immagine di Maria Vergine dell’Impruneta*, Firenze: Appresso Giuseppe Manni all’insegna di S. Gio. di Dio, 1714; David Herlihy, “Santa Maria Impruneta: A Rural Communit in the Late Middle Ages”, in *Florentine Studies: Politics and Society in Renaissance Florence*, ed., Nicolai Rubenstein, 1968, Evanston: Northwestern University Press, pp. 242-276; AA. VV., *Impruneta: Una pieve, un paese*, Firenze: Libreria Salimbeni, 1982. インプルネータの聖母像とその崇敬、および参考文献については、さらに拙著『イメージの地層』（前掲書）第1章を参照。
- (17) Nicolai Rubinstein, “The Beginning of Political Thought in Florence: A Study in Medieval Historiography”, in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 5, 1942, pp. 198-227. フィレンツェの領土拡張と経済発展を背景に、ローマの主要建築を模倣したトポミメーシスとして都市の初期の歴史を物語る古い年代記に以下がある。*Chronica de origine civitatis*, ed., O. Hartwig, *Quellen und Forschungen zur Ältesten Geschichte der Stadt Florenz*, I, Marburg, 1875, p. 37ff; *Chronica de origine civitatis*, ed., E. Alvisi, *Il libro delle origini di Fiesole e di Firenze pubblicato su due testi del sec. XIII*, Parma, 1895. 次の年代記も、フィレンツェをローマ起源とする説を強調している。Sanzanome, *Gesta Florentinorum*, (1230以後), ed., O. Hartwig, *op. cit.*, p. 1ff. 都市伝説など、文学テキストにおける「場の模倣」についても、今後、掘り下げて考えたい。
- (18) Richard C. Trexler, “Florentine Religious Experience”, *op. cit.*; Id., *Public Life in Renaissance Florence*, New York-London: Academic Press, 1980, pp. 70-73.
- (19) 原テキストは14世紀に遡る羊皮紙写本「Archivio di Stato di Firenze, *Compagnia Sopprese*, n. 78」に記されており、現在、フィレンツェの国立古文書館に保存されているが、1866年にアカデミア・デッラ・クルスカ監修のもとフィレンツェで出版された。
- (20) Franco Cardini, “Nostra Signora dell’impruneta: l’immagine, il culto, la leggenda”, in AA. VV., *Impruneta: Una pieve, un paese*, *op. cit.*, pp. 79-88, 82-83; Alberto Del Monte, “La storiografia fiorentina dei secoli XII e XIII”, in *Bullettino dell’Istituto storico italiano per il Medio Evo e Archivio muratoriano*, LXII, 1950, pp. 175-282; B. Quilici, “La Chiesa di Firenze nell’Alto Medioevo”, *op. cit.*, pp. 7-87.

- (21) Cristina Cagianelli, “Falsi all’ombra della sacra imagine: Il santuario etrusco presso la Pieve di Santa Maria all’Impruneta”, in Umberto Laffi, Francesco Prontera, Biagio Virgilio, a cura di, *Artissimum memoriae vinsulum: Scritti di geografia storica e di antichità in ricordo di Gioia Conta*, Firenze : Leo S. Olschki Editore, 2004, pp. 93-128.
- (22) Franco Cardini, “Introduzione. Il culto di Santa Maria dell’Impruneta fra antropologia e storia”, in AA. VV., *L’Impruneta: Una pieve, un santuario, un comune rurale*, op. cit., pp. 1-6; Michele Bacci, *Il pennello dell’Evangelista*, op. cit., p. 301; Id., «*Pro remedio animae*»: *immagini sacre e pratiche devozionali in Italia centrale (secoli XIII e XIV)*, Pisa: ETS, 2000, pp. 52-53.
- (23) トレクスラーの記念碑的研究以後、聖母像がインブルネータでは奇跡力を発揮せず、もっぱらフィレンツェに到来して効力を示すという説が支持されてきたが、ホームズは近年、インブルネータの聖堂に奉納物が捧げられていた記録から、当地でも奇跡力を発揮した可能性を示唆している。Richard Trexler, op. cit.; Megan Holme, op. cit. 筆者としては、インブルネータで起きた奇跡の記録がなく、奉納物の存在だけではトレクスラーの説を覆すことは不十分だと現時点では考えている。
- (24) 「プリメラーナの聖母」については、以下を参照。Maria Grazia Ciardi Dupré Dal Poggetto, a cura di, *Santa Maria Primerana: Chiesa del popolo fiesolano. Le opere d'arte*, Fiesole, 1988; 拙著『イメージの地層』（前掲書）第1章。さらに1586年の聖母被昇天の恒例の祝祭の折にも、この聖母像はフィレンツェに運ばれた。Federigo Bargilli, *L'oratorio e l'immagine di Santa Maria Primerana in Fiesole*, Firenze: stab. tip. G. Civelli, 1890, p. 32.
- (25) Megan Holmes, op. cit., pp. 112-115.
- (26) 拙論「聖母のマントとキリストの異性装」文化女子大学（共同研究）「西洋服飾の史的事象によるジェンダー論」Webテキスト（2010年）http://wrs.search.yahoo.co.jp/FOR=973mPUVV3igD9eOjWdKWPSUFTp766B1lzPpmEhPSZj0if0er.Y1xXr8jIGPix6kWH1EO2K5fCFhRygeIL0E6my_XcATemujj_A7D_mAB_2xLRPooAyqY4fETPKIB3T1VCUmWdZFitGglfo5UCO1bSsnoP5UeBxTR.ExZSumjjk.QdUafvT5MIUXJNzE.NUx）参照。さらに次も参照。Kathryn M. Rudy & Barbara Baert, ed., *Weaving, Veiling, and Dressing: Textiles and their Metaphors in the Late Middle Ages*, Turnhout: Brepols, 2007.
- (27) 1435年のフィレンツェの法律には次のようにある。「一般に聖なる物質や神に捧げられた物質は、まれにしか目にできない場合、敬意を表され大いなる崇敬を受ける。そのため、偉大なる修道院長たちは〔……〕インブルネータの聖母に対する〔……〕並外れた崇敬が、彼女が頻繁に都市に到来することで減退してしまうことがないようにと望んでいる。」Archivio di Stato, Firenze, *Provvisioni*, 125, f. 207rv (17 feb. 1434sf) : « Res sacre deoque dicatae raritate ipsa videndi commendari maiorique in reverentia habere solent; ideo magnifici ... priores ... prohibere cupientes ne singulis devotio quam florentinus populus ad tabulum Sancte Marie Imprunetis ... si Florentiam frequentius delata fuerit, aliqua ex parte minuatur ... »
- (28) 聖母像そのものの物理的外観や付随する装飾についても、拙著『イメージの地層』（前掲書）第1章を参照。なお、2011年に行われた最新の聖母像の修復については、まだ十分な調査に至っていない。
- (29) 受胎告知の聖母像とその崇敬については、拙著『イメージの地層』（前掲書）第1章、奉納像については第3章を参照。
- (30) 銀器収納棚については、機をあらためて、その予型論的図像を中世以来の聖書注釈の伝統に位置づけ、「記憶術的イメージ」と「視覚的注釈図」という視点から論じる予定である。以下も参照。細川瑛梨「フラ・アンジェリコ作「銀器収納棚」装飾パネル試論——「受胎告知」の解釈と「Lex Amoris（愛の掟）」の銘文検証を中心に」『芸術学研究』第5号、京都造形美術大学芸術学研究室、2014年、1-30頁。
- (31) Eugenio M. Casolini, *Michelozzo di Bartolommeo e l'Annunziata di Firenze*, Firenze: Convento della SS.

- Annunziata, 1995; Gabriele Morolli, “‘Sacella’. I tempietti marmorei di Piero de’ Medici: Michelozzo o Alberti? ”, in Gabriele Morolli, a cura di, *Michelozzo Scultore e Architetto (1396-1472)*, Firenze: Centro Di, 1996, pp. 131-170; Timothy Verdon, “Michelozzo e lo spazio della preghiera: il ‘Tempietto’ della Santissima Annunziata”, in *ibid.*, pp. 171-177; Paul Davies, “Imitation in Fifteenth-Century Pilgrimage Architecture: the Case of Impruneta”, in Per Sivefors, ed., *Urban Encounters: Experience and Representation in the Early Modern City*, Pisa: Fabrizio Serra Editore, 2013, pp. 241-282.
- (32) Paul Davies, “Imitation in Fifteenth-Century Pilgrimage Architecture”, *op. cit.*.
- (33) この磔刑像は、現在はサンタ・トリニタ聖堂に存在する。やはり1384年、アレツォおよびフランス同盟軍に対する戦いでフィレンツェが勝利した際の祝典で都市へと運ばれている。D. Emiliano Lucchesi O. S. B., *Il Crocifisso di S. Giovanni Gualberto e lo Stendardo della Croce di S. Francesco di Sales*, Firenze: Gualandi, 1937; Megan Holmes, *op. cit.*, p. 63.
- 古代風テンピエットの類似例として、さらにサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂「プーラの聖母」礼拝堂（1470年代）、アンドレア・デッラ・ロツビア作、モンテヴァルキ、サン・ロレンツォ聖堂参事会聖堂宗教美術館所蔵、聖母の母乳の聖遺物のためのタベルナクルム礼拝堂（1495-1500年）がある。Megan Holmes, *Ibid.*, p. 253, fig. 233, 234.
- (34) Paul Davies, “Imitation in Fifteenth-Century Pilgrimage Architecture”, *op. cit.*. この論文で著者は、さらに身廊頭部に対構造を示す例として、ペルージャ近郊カステル・リゴネの奇跡の聖母の至聖所、パドヴァのサン・フランチェスコ・マッジョーレ聖堂を挙げている。
- (35) Gerhard Wolf, *Salus populi Romani: Die Geshichte römischer Kultbilder im Mittelalter*, Weinheim: Acta Humaniora, 1990, pp. 102-106; Sible de Blaauw, *Cultus et decor: Liturgia e architettura nella Roma tardoantica e medievale*, 2 vols., Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana, 1994, pp. 335-412; Victor Saxer, *Sainte-Marie-Majeure: Une basilique de Rome dans l’histoire de la ville et de son église (V^e-XIII^e siècle)*, Roma: École Française de Rome, 2001; Peter Cornelius Claussen, “Il tipo romano del ciborio con reliquie: Questioni aperte sulla genesi e la funzione”, in *Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome*, 59, 2000, pp. 234-238.
- (36) 本祭壇画については以下を参照。Miklós Boskivits, *Pittura fiorentina alla vigilia del Rinascimento 1370-1400*, Firenze: Edam, 1975, p. 59, pl. 61. 本板絵の足もとの銘文には、ステファノがモンテブオーニ村付近の出身で、14世紀後半に生き、インブルネータに存在したこと、さらにインブルネータ同信会の『会則条項』を作成したことと、この多翼祭壇画を注文したことが記載されている。「Ad honorem et reverentiam Matris Dei ac semper Virginis Gloriose hec tabula facta fuit tempore Reverendi Domini Stephani Plebani pro remedio animae suae et animarum Maiorum societatis et omnium benefactorum istius ecclesiae. Anno Domini millesimo CCCLXXV». Franco Del Grosso, “La leggenda del ritrovamento della Sacra Immagine”, in AA. VV., *L’Impruneta. Una pieve, un santuario, un comune rurale*, *op. cit.*, pp. 95-109.
- (37) Paul Davies, “Imitation in Fifteenth-Century Pilgrimage Architecture”, *op. cit.*.
- (38) 聖帯崇敬と礼拝堂装飾についての包括的研究として、金原由紀子『プラートの美術と聖帯崇拜——都市の象徴としての聖遺物』中央公論美術出版、2005年を参照。巻末の聖遺物譚の邦訳および参考文献も参照されたい。以下も参照。Claudio Martini, a cura di, *La Sacra Cintola nel Duomo di Pisa*, Prato: Martini, 1995.
- (39) Jean K. Cadogan, “The Chapel of the Holy Belt in Prato: Piety and Politics in Fourteenth-Century Tuscany”, in *Artibus et Historiae*, 30, no. 60, 2009, pp. 107-137.
- (40) フィレンツェでやはり奇跡を起こす聖母像の存在によって多くの巡礼者を集めたオルサンミケーレ聖堂でも、奇跡像を擁するタベルナクルムの背面に、聖帯の授与を含む「聖母被昇天」の浮彫が描かれている。聖帯の守護力を敬うためだけでなく、トスカーナの強力な聖遺物と聖母崇敬の

- 貴重な場とを一般に認知させるためでもあった可能性が想定される。Brendan Cassidy, “The Assumption of the Virgin on the Tabernacle of Orsanmichele”, in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 51, 1988, pp. 174–180; Diane Finiello Zervas, “Orsanmichele from its Origins to the Eighteenth Century”, in *Orsanmichele a Firenze*, Diane Finiello Zervas, ed., “Mirabilia italiae”, Modena: Panini, 1996, vol. 1, pp. 11–179.
- (41) Isabella Lapi Ballerini, a cura di, *Agonolo Gaddi e la Cappella della Cintola: La Storia, L'Arte, Il Restauro*, Firenze: Polistampa, 2009.
- (42) 「聖トマスへの聖帯授与」の図像については以下を参照。Richard Offner, *A Critical and Historical Corpus of Florentine Painting*, section 3, vol. 7, New York: New York University, 1957, pp. 48–49; Marchini, *Il Duomo di Prato*, p. 35; Brendan Cassidy, “The Assumption of the Virgin on the Tabernacle of Orsanmichele”, in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 51, 1988, pp. 174–180; Marco Ciatti, “Gli affreschi della Cappella della Cintola”, in Claudio Martini, a cura di, *La Sacra Cintola nel duomo di Prato*, op. cit., 1995, pp. 177–192; 金原由紀子、前掲書、第2部、第1章。
- (43) Stefanie Renner, *Die Darstellung der Verkündigung an Maria in der florentinischen Malerei: von Andrea Orcagna (1346) bis Lorenzo Monaco (1425)*, Bonn: Lemmens, 1996; Penny Howell Jolly, “Jan van Eyck’s Italian Painting: A Miraculous Florentine Annunciation and the Ghent Altarpiece”, in *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, 61, 1998, pp. 369–394; Megan Holmes, “The Elusive Origins of the Cult of the Annunziata in Florence”, in *Analecta Romana Instituti Danici. Supplementum*, 35, 2004, pp. 97–121.
- (44) 奇跡像とファサード内壁という場の問題に関わる興味深い例に、フィレンツェのサン・ピエル・デル・ムッローネ修道院聖堂の磔刑像がある。この聖堂はかつてケレスティヌス派修道会の拠点だったが、1552年、修道士たちがそこで篤く崇敬されていたビアンキの磔刑像とともにサン・ミケーレ・ヴィスドミニ聖堂に移動し、エルサレムの聖ヨハネ騎士団修道女たちが移り住んだとき、かつてビアンキの磔刑像が祀られていたのと同じファサード内壁に自分たちの磔刑像を配置することで、古い奇跡像の崇敬を新たな崇敬像に継承させようとした可能性が指摘されている。Megan Holmes, op. cit., p. 93.
- (45) 本聖堂の歴史的変遷については以下を参照。Francesca Fiorelli Malesci e Guglielmo Maetzke, *La Chiesa di Santa Felicità a Firenze: Notizie archeologiche*, Firenze: Mandragora, 1986, pp. 205–223; Claudia Ricci, *The Church of Santa Felicità in Florence*, Florence: Mandragora, 2009.
- (46) 奇跡を起こす聖像の近代以前の修復や加筆がもつ意味もここでは考慮する必要がある。この点については、拙著『イメージの地層』（前掲書）第2章を参照。さらに、本聖堂が15世紀にブルネッレスキによって古代風建築に着想を得て刷新されている点も、「古代風」様式が名高い奇跡像に関わる複製を祀る空間にいかなる意味を付与していたのかという観点で掘り下げてみる必要があるだろう。本礼拝堂については以下を参照。Ursula Schlegel, “La Cappella Barbadori e l’architettura fiorentina del primo Rinascimento”, in *Rivista d’arte*, serie III, 32, 1957, pp. 77–106; Howard Saalman, “Further Notes on the Cappella Barbadori S. Felicità”, in *The Burlington Magazine*, 100, no. 665, pp. 270–275; Leo Steinberg, “Pontormo’s Capponi Chapel”, in *The Art Bulletin*, 56, no. 3, pp. 385–399; Howard Saalman, “Form and Meaning at the Barbadori-Capponi Chapel in S. Felicità”, in *The Burlington Magazine*, 131, no. 1037, pp. 532–539; Louise Alexander Waldman, “New Light on the Capponi Chapel in S. Felicità”, in *The Art Bulletin*, 84, no. 2, 2002, pp. 293–314.
- (47) Megan Holmes, op. cit., pp. 77–79.
- (48) S. Lang, “The Program of the SS. Annunziata in Florence”, in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 17, no. 3/4, 1954, pp. 288–300; 石川清「プラートのサンタ・マリア・デッレ・カルチエーリ聖堂実施案変更の経緯について——ルネサンス期の集中式聖堂再考」『地中海学研究』第23号、2000年、59–90頁；同「フィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂の古代祖型に関する

る研究」『愛知産業大学紀要』第12号、2004年、17-22頁。

- (49) Davies, Paul, “The Madonna delle Carceri in Prato and Italian Renaissance Pilgrimage Architecture”, in *Architectural History*, 36, 1993, pp. 1-18; Id., “La santità del luogo e la chiesa a pianta centrale nel Quattro e nel primo Cinquecento”, in Bruno Adorni, a cura di, *La chiesa a pianta centrale: tempio civico del Rinascimento*, Milano: Electa, 2002, pp. 27-35; Robert Maniura, “The Icon is Dead, Long Live the Icon: the Holy Image in the Renaissance”, in Antony Eastmond and Liz James ed., *Icon & Word: the Power of Images in Byzantium*, Aldershot/Burlington: Ashgate, 2003, pp. 87-104; Paul Davies, “The Lighting of Pilgrimage Shrines in Renaissance Italy”, in *Analecta Romana Instituti Danici. Supplementum*, 35, 2004, pp. 57-80.; Id., “Santa Maria del Calcinaio a Cortona come architettura di pellegrinaggio”, in Francesco Paolo Fiore, a cura di, *Francesco di Giorgio alla corte di Federico da Montefeltro: Atti del convegno internazionale di studi, Urbino, Monastero di Santa Chiara, 11 - 13 ottobre 2001: 2 Origini e Fortuna di un Linguaggio Architettonico*, Firenze: L.S.Olschki, 2004, pp. 679-706; Robert Maniura, *Pilgrimage to Images in the Fifteenth Century: the Origins of the Cult of Our Lady of Częstochowa*, Woodbridge: Boydell, 2004; Paul Davies ed., *Architecture and Pilgrimage : 1000 - 1500; Southern Europe and Beyond*, Farnham [u.a.]: Ashgate, 2013.

本論文は、科学研究費基盤研究（C）「イメージの記憶とアナクロニズムをめぐる歴史人類学的研究」（2013～2015年度）による研究成果である。